



コンピューター技術の普及を通して “貧困の連鎖”を断ち切る ～スリランカ僻地農村での活動～

特定非営利活動法人アプカス 事務局長
伊藤 俊介 Syunsuke Ito



NPO法人アプカスでは、KDDI 財団(旧ICF)からの助成を受けて、スリランカの僻地農村において、子どもへのコンピューター&インターネット技術の普及活動を行っています。

同地域は、世界的にも紅茶の産地として有名なウバ州にあります。首都から南東部に車で7時間離れた場所にあり、電気水道及び道路など基礎的な社会基盤も充分には整っていない僻地農村地域です。また、長年続いた北東部の内戦の境界県であることも影響し、未だ「開発」の流れから取り残されています。同地域の多くの住民はいわゆる零細農民で、生産性の低い焼畑農業などを行い、農閑期には日雇いの仕事を求めて出稼ぎに行くといった生活を送っています。昨今の原油価格や食料価格の高騰で、生活はますます苦しくなっており、子どもの教育や将来について考える余裕すらないというのが現実です。

一方、スリランカ全体で眺めてみると、都市部を中心にコンピューター&インターネット技術が急速に普及し始めており、進学や就職の際に英語能力と並びコンピューター技術が重要視される傾向が強まっています。しかし、政府の統計によると、僻地農村地域のコンピュータ普及率は10%前後であり、学校や私塾でもコンピューター技術を学ぶ場所はなく、コンピューターを見たこともない子どもがほとんどです。今後、都市と農村間でIT環境の格差が広がる可能性が十分にあり、特にコンピュータ普及の遅れが子どもの未来に悪影響を与え、貧困の連鎖・貧困層

の固定化という深刻な社会問題に直結していくことが懸念されています。

当法人では同地域において以前より有機農業技術の普及活動を行っており、村人や教育関係者との対話の中で、上記の問題の重大性を認識し、この活動の立案につながりました。

>>> 活動の目的

本活動は、「僻地農村の子どもたちがコンピューターに触れる機会を作り、基本的な操作方法等を学ぶこと」さらには「インターネットで世界とつながり、E-mailを介して日本と交流を行う体験を通して、コンピューターが持つ様々な可能性を感じ、学習意欲を高めること」を目指しています。

>>> 活動開始

2009年4月、活動地域であるシーヌックワ村を訪れました。コンピューター教室の場所を選び、先生を探し、村役場からの許可を取り、関係者と協議を重ねました。ほどなくして、教室として使用する家屋の改修工事を開始しました。同時に、村の数カ所にコンピューター教室の案内板を掲示し、興味がある人は登録するようと呼び掛けました。わずか2週間で、登録した子どもの数は200名以上。当初に予定した人数以上の参加希望者に我々も驚くとともに、子ども・保護

者を含む村人の期待を強く感じる事になりました。

4月下旬には、コンピューター5台を設置した教室が完成。通常の農村地域の家屋は、天井やしっかりしたドアがありませんが、埃やネズミ等からコンピューターを守るために、しっかりとした天井とドアを設置しました。ネズミがケーブルをかじって断線させてしまう障害もスリランカでは日常の事です。全ての準備が終わり、いよいよ教室が始まる日がやってきました。初めて見るコンピューターに目を輝かせる子どもたち。登録した子どもを5つのグループに分けて、理論と実践を組み合わせたコースを常駐インストラクターが中心となって始めました。コンピューターの台数に限りがあるため、まず、理論を全員で学び、それぞれのスケジュールに合わせて教室に足を運び、操作を学ぶというスタイルで学習が進みました。教室は、月曜日から土曜日の朝8時半から夕方6時まで開放し、生徒が学校にいる午前中を利用して、学校を卒業した子どもたちにも学ぶ機会を与えました。スリランカの学校は基本的に午後1時半頃に授業が終わるため、放課後に子ども

たちはコンピューター教室に通い、学習を深めて行きました。

5月には、保護者を対象として「IT技術の重要性」について講習会を開きました。2時間の講習会終了後、「今まで、自分とは関係ないし、それほど必要でないと思っていたが、その重要性や子どもがそれを学ぶことの大切さが理解できた」という声が多く聞かれるとともに、「できれば、自分達もコンピューターを学びたい」という要望も出ました。

さて、スリランカで利用されているコンピューターは全てOSが英語です。そのため、初めてコンピューターに触る子どもたちは、英語の知識も同時に学ぶ事になります。母国語でないOSで学習することは大変なのだと思いますが、子どもたちの“吸収する力”は非常に強く、あっという間に基本的なコンピュータ用語(=英単語)を覚えていきました。コンピューター技術習得と英語学習は親和性が高いということを我々も改めて知ることとなりました。また、インストラクターの先生は一人の



ため、全ての子どもに対して手取り足とり教えるのには限界があります。そんな中、高学年の子供たちが低学年の子どもへ教えるというシステムが自然に始まり、コンピューター教室を通して、子どもたち同士のつながりが深まるという副次的な効果も現れました。

4つのグループが2ヵ月のコースを終え、パソコン操作とオフィスソフトの基礎的な知識と技術を身につけて、最後の試験を見事に通過し、空き時間を利用しながら実践力を高めていっています。現在、最後のグループのコースが行われており、これが終了すると187名の子どもがコンピューターの基礎を学んだ事になります。当初の予定では、E-mailとインターネットを利用して日本との交流等を体験する予定でしたが、電波の状況が悪く、インターネットへのアクセスが安定しないため、まだ実施できずにいます。アンテナを設置すればアクセスが可能になるということで、近日中に工事をを行いインターネットへのアクセスを確保し、残りの活動を行う予定です。

>>> 最後に

本活動を通して、コンピューターを見たこともなかった子どもたちが、今では基礎的な知識・技術を身につけ、コンピューター上での文章作成等ができるようになりました。子どもたちは、新しい“世界”を体験し、その興味・関心をますます高め、意欲的に学習を続けています。今後、基礎コース終了後、次のステップへと進み、子どもたちの学習をさらにサポートするとともに、最終的には、コミュニティがコンピューター教室を自主的に運営できるように、関係者との協議・連携を深めていきたいと考えています。

活動を進める中で、子どもや保護者など多くの人から、助成をしていただいた KDDI 財団(旧 ICF)への感謝の気持ちを届けて欲しいと頼まれました。この場をお借りして、人びとの感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。この様な活動をご支援いただきまして誠にありがとうございました。



コンピューター教室の近くに設置された看板。



コンピューター教室の初日。先生も生徒も少し緊張気味です。